

2015年8月23日川越教会

## 力を合わせて

加藤 享

### 【聖書】エフェソの信徒への手紙 4章11～16節

そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされたのです。こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。こうして、わたしたちは、もはや未熟な者ではなくなり、人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されたりすることなく、むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます。キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。

### 【序】助言を受け入れたモーセ

今日は旧約聖書「出エジプト記」の第11回の学びです（出18:13～27）。エジプトの奴隷にされてしまったイスラエルの民を、全能の主なる神は、モーセを指導者に立てて、大いなる奇跡をもって、救い出してくださいました。イスラエルの民がエジプトを脱出してシナイ半島を南に下り、ホレブの山を目指して荒れ野を進むニュースを伝え聞いたミデアンの祭司**エテロ**は、モーセの妻であり、自分の娘の**ツィボラ**と**二人の孫**を連れて、モーセを訪ねて来てくれました。**家族との嬉しい再会**です。どんなに嬉しかったことでしょう。

口下手（くちべた）のモーセが、イスラエルのために主がファラオとエジプトに対してなされたすべての事、またここまで来る途中であらゆる困難に遭遇したけれども、主が救い出して下さったことを、詳しくエテロに報告したのでした。その一部始終を聞いて、エテロは賛美の歌をうたって喜び、**主をほめたえました**。そして二人で焼き尽くす献げ物といけにえを神にささげ、家族と共に長老たちも集めて、神の御前で食事をしました。

楽しい団らんの一夜が明けました。するとモーセは何時ものように**裁きの座**について、相談に集って来た人々の相手をし始めました。順番を待つ人々の長い列が、夕方まで続きました。その様子を一部始終見ていたしゅうとのエテロは、遂にモーセに語りかけました。「あなた一人だけが座に着いて、民は朝から

晩まであなたの裁きを待つて並んでいるのか」モーセは答えました。「民は神に問うためにわたしの所に来るのです。——わたしはそれぞれの間を裁き、また、**神の掟と指示**を知らせるのです」

エテロは申しました。「**あなたのやり方はよくない**。あなた自身も、あなたを訪ねて来る民も、きっと疲れ果ててしまうだろう。このやり方ではあなたの**荷が重すぎて**、一人では負いきれないからだ。——わたしの言うことを聞きなさい。助言をしよう。——民全員の中から、神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物を選び、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長として民の上に立てなさい。平素は彼らに民を裁かせ、大きな事件があったときだけ、あなたのもとに持って来させる。小さな事件は彼ら自身で裁かせ、あなたの負担を軽くし、あなたと共に**彼らに分担させなさい**。」

モーセはしゅうとの言うことを聞き入れ、その勧めの通りにしたのでした。偉いですね。彼はもう80才を超えていました。神のお召をいただいてエジプト国王との厳しい交渉をやり遂げ、150万人を超える奴隷集団をエジプトから脱出させて、シナイ半島の荒れ野の中をここまで導いて来たのです。

私も83才を越えて、いまなお牧師をさせていただいていますが、私が及びもつかない大きな責任を果たして来たモーセです。それでも「あなたのやり方はよくない」といわれると、エテロの率直な**助言を素直に受け入れて**、そのまま実行に移しました。私たちも、よくよく自戒しなければなりませんね。

エテロは安心して、ツィポラと二人の孫を置いてミデアンの地に帰って行きました。ここまでが出エジプト記18章、今日の聖書の学びの記事でした。

## 【1】手の指に紐を結び

さて私は、ここを読んで新たな疑問を抱きました。人間関係のゴタゴタをきちんと裁く人を立てるということは、なるほど大切です。そのために私たちの社会には、**裁判官や弁護士**が大勢いるのです。彼らは法律に関する勉強に長い時間をかけ、資格試験に合格した上でその役割を果たしています。

**モーセ**にしても若い時にはエジプトの王女の養子として、エジプトの王宮で特別な教育訓練を受けました。更に80才になってからでしたが、エジプトで奴隷扱いを受けて苦しむ同胞を救い出すために、神に召し出されてからでも、**日々に神の語りかけを聞き取りながら**、神の民を導いて来ています。ですから

神の言葉を聞きながら、大勢の民の様々なもめ事や訴えを適切に裁くことが出来ました。

ですからここで、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長を選んだとしても、それで直ちに民全体のもめ事がスムーズに裁かれていくものではありません。先ず選んだリーダーたちに、神の掟を正しく学ぶ**教育訓練**が必要です。そして何よりもその前に、そもそも**神の掟**が明確に示されていなければなりません。モーセはどのようにしたのでしょうか。

神はそのことをちゃんとご存知で、必要な手をお打ちになっておられます。それが19章、20章の記事です。即ちモーセをホレブの山に召して、**神の掟（十戒）**を与えて、イスラエルを神の民とする**契約を結ばれた**のです。そして立てられたリーダーたちが、この掟を基本として**神の御心を学びわきまえた上で**、民のもめごとを裁き、導いていくようになさったのでした。

更に次の点が大事です。与えられる神の掟は、リーダーだけが良く学び、心得おけばよいというものではありません。それでは大多数の民衆は、何時までもたっても自分自身でもめ事を解決できず、リーダーの裁きに頼って生きていくこととなります。ですから、**民全体の律法教育**が大切です。そこで神は更に、次のように命じておられます。それが**申命記6章**の記事です。そこでは十戒が与えられた記事に続いてこう記されています。

「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、**子供たちに繰り返し教え**、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを**語り聞かせなさい**。更に、これをするしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」（6～9節）

大人たちだけでなく子供たちにも繰り返し教え、覚えさせよ——すなわち**家庭教育**ですね。神の掟は、各家庭で家族全員で毎日繰り返し学ぶようにと、神は命じておられます。これが大切ですね。「**自分の手に結び**」とありますね。これは、私にとって忘れられない言葉です。

私は戦後程なく、中学3年生の秋から友人に誘われて、**目白ヶ丘バプテスト教会**の礼拝に出席するようになりました。**熊野（ゆや）清樹**先生はミスターバプテストと言われ、バプテスト連盟の理事長を永らく勤められました。心から尊敬できる牧師でしたので、私はこの先生の許で牧師になる修業を続けたいと

思い、福岡の西南神学部には行かず、目白ヶ丘教会で教会生活を送りながら、日本基督教団立の東京神学大学で6年間学びました。

丁度神学校に進む1年前のことです。目白ヶ丘教会は西南神学部を卒業した栗本先生を副牧師として迎えることになりました。どこかに下宿するよりも、牧師館で熊野牧師と一緒に生活した方が修業になるだろう、それならば加藤も一緒だと栗本先生も気楽だろうからと、二人でお世話になりました。

ある日のことです。朝食の食卓に着くと**熊野夫人**が「享さん、気が付いた」とおっしゃいます。目の前の壁に紐を結んだ人差し指を掲げて**少女の絵**が貼られていたのです。「ほら、貴方のズボンの前ボタン、ちゃんとかけてあるの？」それから食事の度に、少女の人さし指を見ながら、申命記6章の言葉を心で読み返して1年間過ごしたのでした。

出エジプト記を1章から読んでみますと、イスラエルの民をアブラハムに約束されたカナンの地に戻すに当たっての神の導きが、**深い教育的配慮**のもとに一つ一つ順を追って与えられていることに心を打たれます。私たちは直ぐに目的を遂げたいと焦ります。祈りが直ぐにかなえられないと、不信仰に陥ります。**神の御心**がなされていくことをこそ**最善**と信じて、導きに従って**一步一步**進んで行くことの大切さを、あらためて示されます。

## 【2】各教会主義の大切さ

一昨日と昨日の二日間、東京の大井で**全国壮年大会**が開かれました。川越から山下先生、飯塚さん、澤田さん、阿久津さん、加藤の5人が参加しました。壮年会の大事な働きの一つが、神学校に学ぶ学生たちへの**奨学金支援**です。どうぞ皆さんも、神学生奨学金献金にご協力下さい。そこで今回は第2日に7グループに分かれて西南神学部の先生7人から90分の**特別講義**を聞きました。

私は教会史の金丸英子教授の「ドージャーレポートと戦後のバプテスト」を聴講しました。**EBドージャー宣教師**の両親は戦前の西南学院生みの親の一人です。戦後2年目に早速来日して、米国南部バプテストの**日本伝道再開**の準備、働きかけをされました。その時焼野原の東京にはホテルがありません。目白ヶ丘教会の牧師館に止宿して、熊野牧師と相談しつつGHQとも打合せをしてから、九州へ行き、西南女学院・西南学院で特別集会をし、学校関係者や近隣のバプテスト系の教会の代表者たちと懇談・協議しました。

その結果翌年**1947年4月3日**に、戦時中に政府の命令で統合させられていた

日本キリスト教団から離脱した 16 教会が相集って、**日本バプテスト連盟を結成**したのでした。その時の文書にこのような言葉が記されています。「去年の 10 月、**日本基督教団**は自らを、異なる教派による協力伝道組織ではなく、**一つの教会**であると公に宣言しました。このことは私たちバプテストにとって、バプテストの伝統である**各個教会主義の立場**から、到底賛成できるものではありません。そして今年 4 月 3 日、全員一致で、**日本バプテスト連盟の結成**を決議しました。」

私は、基督教会が小さな群れに分かれて活動するよりも、一つにまとまって日本全国に福音伝道していくことの方がはるかに効果的でよいのではないかと。たとえ戦時下の行政指導によるとはいえ、日本基督教団としてまとめられたことは、**強いられた恩寵**で恵みだったのではないかと思います。そして連盟の理事長をしておられる熊野先生に、不満をぶつけていました。

でも自分で日本基督教団の神学校に 6 年間在籍している間に、**教会観の違い**がよく分かってきたのです。私たちの川越教会は今日礼拝後に臨時総会を開いて、教会にとっての大事な事柄を皆で相談します。そして決めたことはそのまま教会の方針として、実行していけます。しかし日本基督教団の場合は、**教団・教区・教会**と縦割りの教会組織なのです。教会の決議は原則として教区、更に教団の承認を得なければなりません。**牧師は教区から**各教会に派遣される教職で、教籍は教区にあるのです。

私たちの川越教会は、私たちが牧師を招き、皆で一緒に相談しながら、他からの指示・指導を受けることなく、自分たちの歩みを進めていきます。これが**各個教会主義**です。そしてこれは私たち**各自の信仰の確立**にとっても、大切なことではないでしょうか。

### **【結】皆が成熟・成長する教会**

今日の聖書の箇所は、パウロがエフェソの教会に宛てた手紙です。エフェソの教会には使徒、預言者、福音宣教者、牧者、教師と呼ばれるリーダーたちが働いていたようです。丁度モーセがイスラエルの民の中から千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長を選んだのと同じですね。その目的は何か？

「**キリストの体**を造り上げてゆき、ついには、わたしたちは**皆**、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、**成熟した人間**になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで**成長する**のです」(4:12~13)

ここで大事な言葉は、「**私たちは皆、成熟した人間になり、成長するのです**」です。リーダーたちだけではなく、**教会員皆が成熟**した信仰者になり、**成長**して、キリストの恵みにあふれる豊かな**キリストの体・教会**を造り上げて行くためのリーダーなのですね。

旧約聖書では、神の律法が与えられた時に、「**子供たちに繰り返し教え、――寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。**」と命じられました。神の掟は各家庭で**家族全員で毎日繰り返し学ぶ**ようにと、命じられました。

これに対してパウロは、**教会**を多くの部分から成り立っている**キリストの体**と呼び、「あらゆる節々が補い合い、組み合わせられ、結び合って、分に応じて働き、**体を成長させていく**」と語っています。彼はコリント教会への手紙では、体には不要な部分は何一つない。どのような部分でも全体にとって無くてはならない大切な部分だと言っています。依存的であったものが、組み合わせられ、結び合うことで、**分に応じた働きをし**、体は成長していくのですね。

私たちの教会も**幼子たち**が礼拝に出席して、声を上げています。子どもたちは、この礼拝堂に満ちているキリストの霊の祝福を全身に浴びています。そしてやがてキリストの体の一員として、皆としっかり結び合わされて、分に応じて働き、教会を成長させていくようになるのです。嬉しいですね。

神のみ言葉に養われ、キリストの御霊に導かれて成長し、奉仕の業に適した者とされ、川越教会というキリストの体を、キリストの恵みの満ち溢れる豊かな体に造り上げて参りましょう。

祈ります：神さま、今日も礼拝を守り、あなたを賛美し、祈りを捧げ、また御言葉を学ぶことが出来ました。有難うございます。主イエスは、足を洗う僕になるようにとお命じになりました。どうぞ、身を低くして足を洗う働き人として成長していけますように、お導きください。十字架の主イエス・キリストの御名によって、お祈りします。     アーメン